

ロシア革命期北カフカスにおける「山岳民」の活動について —1917年二月革命から十月革命までにみる「山岳民」の自治構想—

染 矢 文 恵

「山岳民Горцы」とはロシアにおいて今日ではほぼ固有名詞として使用される、北カフカスに居住する諸民族の総称である。本報告では、1917年の二月革命後に結成された、現地の知識人から成る山岳民連盟という組織が、「山岳民」という従来ロシアによって使用されてきた北カフカス諸民族の総称に積極的な意味を付与し、地域の統合を試みる動きと、その過程で現れて来る諸問題から、多様な民族が居住する北カフカスの諸民族が考える地域のあり方、その「理想」と「現実」の一端を示した。

歴史的にみてイスラームがしばしば統合の主要なスローガンとされた北カフカスという地域において、「山岳民」というアイデンティティの提唱は、宗教や言語、民族を超えようとする新しい試みとなった。1917年の二月革命後、エス・エル党员でバルカル人のバシヤート・シャハノフが組織者となって、山岳民連盟が組織され、5月、第一回山岳民大会が開催された。この大会にはチェチェンやダゲスタンの諸民族等山地の住民のみならず、現地の正教徒（オセット、カバルダ人中心）、山岳ユダヤ人、また平地民とされるクムイク、ノガイ人も参加し、大会参加者は、北カフカスという地域の民族的な多様性を認識しつつも、「山岳民」の間に、統一されるに値する共通の歴史 —シャールミルのジハード、ロシアによる抑圧— や、文化的、経済的、法的な共通性があることを強調した。「山岳民」はひとつの民族нацияであるという主張もなされ、「山岳民」の自治の形態としては、ほぼ同時期に開催されていた全露ムスリム大会においても多数の支持を集めた、領土的民族自治が採択された。

しかし、8月、第二回山岳民大会が計画されたが、開催にあたって大会の主催者であった山岳民連盟と、ダゲスタンにおいて影響力を持つナクシュバンディー教団の一部のシャイフの間にずれが生じた。イスラームを世俗的な秩序のうちに制度化しようとする山岳民連盟に対して、二月革命後にシベリアから帰還したシャイフ、ウズン・ハッジは、19世紀の神権国家イママートの再建を目指し、第一回山岳民大会で北カフカスのムフティに指名されたナジュムッディン・ガツィンスキーをイマームに擁立しようとした。北カフカスに居住するコサックや、ロシア系住民をも集めて当面の問題を討議しようとしていた第二回大会であったが、ウズン・

ハッジらの呼びかけに応じて多くの聖職者や住民が大会の開催地に殺到し、イマームの選出を要求したため混乱が生じ、大会は開催出来なかった。イマームの称号は、北カフカスにおいて、ロシアへの抵抗運動における政治的、宗教的指導者の意味合いが強かったため、山岳民連盟の方針に賛同していたガツィンスキーは、イマームの選出という行為がロシア人や異教徒との軋轢を生みかねないとして、イマームの称号を使用しないことを宣言した。

その後改めて第二回大会が開催されたが、ここでは「山岳民」の自治政府が宣言された。春から秋にかけて北カフカス諸民族の中ではイングーシ、オセツトなど、民族毎の委員会の組織化も進められており、将来的には北カフカス内で民族 племя 毎の自治権が尊重される「山岳民」の連邦制を実現し、ロシアに民主的な連邦共和国が出来次第、「山岳民」の連邦がロシアの連邦共和国を構成する自治州 урзат となることが目指された。

しかしながら、北カフカスという範囲で自治の問題を考えるにあたって、明確にしておかなければならないものの一つに、「山岳民」の間に楔状に居住するテレク・コサックとの関係があった。第一回山岳民大会ではコサックも大会に招待され、「山岳民」とコサックの友好関係の樹立が目指されたが、一方で「山岳民」とコサックの住民の間では、帝政期からの土地所有の不均衡による対立が、第一次大戦の混乱と相まって顕在化し、十月革命後にはその関係は更に悪化した。十月革命後反ボリシェヴィキを宣言した山岳民連盟はコサックとの連携を呼びかけ、両者の連立の自治政府を組織したが、焦眉の問題である土地問題を解決することは出来なかった。これに対して1918年初め、土地問題、民族問題を主要な議題としてテレク諸民族大会が開催され、土地を持たない「山岳民」を擁護したボリシェヴィキが住民の支持を得るようになり、その後コサックの強制移住と、「山岳民」に土地を分与する政策を採った。

このように二月革命後、山岳民連盟は、北カフカス内で諸民族が自治権を擁し、かつそれら諸民族が統合された「山岳民」の自治を実現しようと試みた。しかしイママート再興の機運、「山岳民」を擁護しコサックを排除するボリシェヴィキの強硬な土地政策の前に、住民の支持を得られず、北カフカスにおけるその影響力を次第に失っていったと言える。

(東北大学大学院博士後期課程)